



Title	阪倉先生を囲んで
Author(s)	山口, 正男
Citation	懐徳. 1966, 37, p. 130-134
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90436
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

が配られる。一人で持つと少し重いので、兩側の人に助けられて頂く。味は又格別でおいしい。各所に笑いの聲が聞えてなごやかな空氣に包まれる。

阪倉先生を囲んで

昭和四十一年二月十三日

京都吉田阪倉先生邸に於て

出席者 阪倉篤太郎先生

中川幸三 酒井全太郎

藤塚誠二 山口正男

山口正男編

中川 始めてお出まし願いましたのは、昭和八年でしたか。

先生 えゝそうです。始めは古事記で、濟んでから枕草子、それから萬葉になりました。萬葉は大分前から續いておりました。一からずつと始めて十二位まで半分位です。

階の書庫のところでやりました二三年續いたと思います。

中川 大江先生が亡くなられてから、先生ばかりでしたね。その時分は世の中も落付かんで、五六人位か十人までに止まりましたけど――

先生 そうそう、ひどい時はもう三人位でした。

中川 木曜日は盛んでしたね。先生の時は春からでしたね。漢學史をやっておられた大江先生と一緒じやなかつたですか。

先生 いや一緒じやなかつたです。週二回でした。二

この後關西學院の齊藤先生の説明で、金堂や巨大な大塔の礎石、靈寶館の佛像、舍利塔等を見學して、石塔で有名な般若寺に向つた。

それですっかり止めになりましたな。本も皆大阪大學へ行つてしまつたしね。

中川 先生あれでもう定日講義のしまいになりましたね。其後は春秋二回になりました。やはり皆さんも定日講義の復活を希望しておりますのですがね。あれでなければ、ほんとうの懷德堂の趣意などの實現が不可能と思しますね。春秋二回ではね。やはりきまつたテーマで續いてもらうという事が、一番大事なことだと思いますね。

先生 ご承知の通り私は大阪生れで、大阪へ週に一回行くのが却つて樂しみでしてね。いつも夜の講義を晝から行くのです。學校の講義が済むと、晝から出かけて行つて、本屋をひやかしたりなどしてね。

中川 本屋の方は昔なら京都のようないきませんけれど、大阪は大分此の頃、よくなりましたね。先生また歩いていたゞけるところがあるのですがね。大學は……

先生 大學は東京です。

中川 中學校は――

先生 大阪です。

中川 高等學校は――

先生 京都です。丁度焼けた日でしたな。私行つたのは。

酒井 十三日の晩ですよ焼けたのは。

先生 そうそう、だから十四日です。私の講義は、丁度木曜でした。それでねやられたとゆうことは知つていましたが、京都でははつきり分らんでしょう。なに、しれてると思つて行つたのですが、天満橋へ降りたら何も無いんでしよう。電車は無いし、とにかく歩いて見ようと思つて、松屋町筋を懷德堂まで歩いたですわ。そしたら未だあちこち燃えていましたがね。まだ大丈夫だらうと思って、堂まで行つて見たらそしたら何んにも無い。

中川 まだ燃えてましたか。

先生 まだ燃えていました。電線などもそのへんに一杯でして恐かったです。歸りも仕方なく、又天満橋まで歩きましてね。着いたら又えらい人でね。枚方邊へ歸る人でね。それでも仕方なく天神橋まで又歩き、そこから電車に乗りました。えらい思い出でした。實際びつくりしました。あゝいう光景は私、懷德堂へ通つてゐる間の一番の悲劇でしたね。

中川 此の間生駒の石切に参りました。そこにその邊の寺田とゆう舊家なんですけれど、ずっと行きますと隅に懷德堂の（學）という瓦が置いてありましたから、これは昔のか、大正の頃のかと尋ねますと、いやこれはつい此の間つぶした懷德堂というところのもので、石も、焼

けた門柱も、表札も内にあるとの事なのです。懷德堂のそばの博物場の石と、昔の焼けた堂舎の階段の石とかを全部持つて来ているのです。藤塚さんの書いた懷德堂記念會の表札も、焦げた門柱もあるのです。石はこれだけではなく、石切神社の横手にも未だ置いてあるのです。それで寫眞を撮つて來たのですが——、そして土地の同じような家の方に尋ねますと、寺田さんは元府廳えも勤められた方で、石材にも關係があつたので、石の方の處分も引受けられた關係で集まつてあるのだろうとの事でした。その大正の建物の石垣、瓦は今ではもう記念品になつてしまつていますね。府廳へ勤めておられたいたによるにしても、ひと所に纏まつているのは一寸面白いと思ひます。

先生　せめてその表札だけでもほしいですな。瓦だけでも……。

藤塚　懷德堂の跡は今住宅公園に關係した事務所が出来ているね。

中川　先生、然し書庫だけは残つています。これは賣渡したものですが、火に堪えて残つています。

酒井　北側の土壠は一部残つていますよ。

中川　講義にはの方も多かつたね。

先生　女人の人がちよいちよい來てましたな。お医者さ

んの奥さんがいましたね。

藤塚　濱地さんの奥さんでしよう。
先生　習いに來ていた人で、やはり堂友會へお顔を出されますか。

酒井　たまにです。

中川　いま頃は中々寄る機會が少のうなりました。定日講義にですとね、週に一回は——

先生　よう甘酒を……（一同笑聲）

中川　甘酒會ね。あの甘酒會は辛黨の西村先生のご發案で——今も昔も同じ事と思ひますが、やはり今まで懷德堂でやつていたいた様な古典の定日の講義が、一日も早く復活していただかないと困りますな。

先生　出来んと困りますな。やはり便利のところでないといけませんね。

中川　聽講生の中で、南久太郎町の東堀突當つたところの濱側で若干の土地があつて、懷德堂が定日講義をするとかであれば寄付するという方があるのですが、九十九坪あるということです。一體に記念會のほうは資金難でしうる。昔は懷德堂五同志という具合で、聽講者も皆財力がよかつたのですがね。そうなりますと昔の時世も有難いものですが、永田仁助さんという方などは、やはり大阪の人だけで、熱の入れ方も違つたのだろうと思ひます。

いますが、しみじみ永田さんの有難味が、分りますね。西村先生、内藤先生、狩野先生などの先生方以外に、永田さんという人がいられて、懷德堂が維持出来たのですね。

先生 わたしらが知つてからでも、たくさん亡くなられましたね。懷德堂の先生がたで――

中川 狩野先生はご長命でしたけれどね。わりかた懷德堂関係の先生方はご短命でしたね。六十臺が多いですね。

酒井 先生、失禮ですがおいくつになられますか。

先生 わたしは満が八十六です。あしかけ今年八十七です。私の父は七十八位でなくなりました。

中川 先生はお父さん似ですね。わたしたち小學校へ通つてゐる時分に、夏の朝早いと表へ椅子を持ち出しておられたね、先生のお父さんはいつも新聞を読んでおられました。先生のお孫さんもご立派になられて……この頃ご令息の本もよく出でているようですな。

先生 えゝ。東京の聖心女子大學に轉任することになりました。四月から。家がなくて困つております。今狩野の家に一緒におります。

中川 早く懷德堂の復活ということになつて、先生にもお遊びに來ていたらどうなると宜しいので

すがね。記念會の方でも色々お骨を折つて基金のほうも充實して、事業の、復活ということをお考えになつていて、たゞいておるようですがね。

先生 一たん無くなると、むづかしいですね……あとへ残すということは、再建というか、もう一ぺん復活するという事は中々むづかしいですね。

中川 一つの機運というか、チャンスというのがあって、人文會から懷德堂重建という風に、何かやはり色々な要素があつて――

酒井 今年の五十年記念祭時に、そういう機運が盛りあがれば宜しいですね。

中川 今、適塾でお祭をいたしておるのを、五十年記念には阪大の講堂でも拜借して執り行なおうかということを、一寸漏れ伺つたのですが、先生お天氣も宜しうございましたら、是非まげてご出席を……。

先生 えゝその時分になつたら、もう行けるだらうと思います。

中川 吉田先生とは中學でご一緒だったのですね。精神科の和田先生もご一緒でしたか、今お達者ですか。

先生 さあ和田さんはどうですかね。中川 左近司という海軍の將官がいられましたね。先生とたしかご一緒だったと思いますがね。水交社名簿に

のつていますね。中學の同級というともう少ないのでしょうね。

先生 私と同級という者はもう殆んどおりませんですね。中學の同級は二十人あまりいましたのですがね。懷德堂へ稽古に來ていた人のうちで、田中重太郎とゆう人がいましたが、私の講義も聽いたそうですが、今大阪の相愛大學にお勤めですが、時々會いますけれど、の方はまだほんとにお若い時分に懷德堂に行っています。

中川 朝日の古典全集の中に校本が出ていますね。

先生 枕草子の専門家ですね。

中川 大高におられた關係で、懷德堂の定日講義とか、定期講演を聽かれたとゆう方で、もう一角の教授になつておられる外山さんとか、竹中さんとか、もう學位をとつておられる方もあり、世代の變つたことがつくづく感ぜられますね。

先生 田中さんはもうその時分には枕草子を研究されていたのではないですかね。丁度私の枕草子の時間に来ていましたから。懷德堂の五十年というのは……。

藤塚 講義始めてから五十年として、懷德堂記念會と

いうのは大正二年頃に出來ておるので、それから建築したりする間がありました。講義を始めて五十年になります。

先生 私が行くようになつたのは、それから大分あとですね。

藤塚 え、そうでござります。

先生 林先生は私の先生なんです。三高でね。

中川 先生の先生になりますか……。

先生 丈夫な人でしたがね。胃癌でなくなられました。陸軍少尉でね。

中川 雨の日なんか長靴を履いてね。天満橋からずっと歩いて來られた。電車なんかに乘られずにね。健康上ね……。

先生 私もいつも天満橋から歩いて行きました。私が好きでね。此頃足がこうなりましたが、前は歩くのが好きでね、隨分歩きました。少々電車があつても乗らずに。そのお蔭で達者なんかも知れません。晝早くから行つて、心齊橋やら千日前も歩きました。

(終)